

第24回福祉作文・ポスターコンクール

入選作品集

社会福祉法人

加美町社会福祉協議会

目次

【福祉作文・小学生の部】

《最優秀賞》

鳴瀬小学校 三年 高橋 美礼 …… 1

《優秀賞》

中新田小学校 六年 佐々木 ゆい …… 2

広原小学校 四年 佐々木 悠士朗 …… 4

《佳作》

小野田小学校 三年 横内 碧真 …… 5

広原小学校 四年 星 幸那 …… 6

広原小学校 六年 相澤 佑磨 …… 7

広原小学校 六年 菅 笑瑠 …… 8

【福祉作文・中学生の部】

《最優秀賞》

中新田中学校 二年 小杉 悠太 …… 10

《優秀賞》

鳴峰中学校 二年 伊藤 つばさ …… 11

鳴峰中学校 二年 佐々木 三祐 …… 13

《佳作》

中新田中学校 二年 宍戸 光 …… 15

鳴峰中学校 一年 塩田 樹 …… 16

鳴峰中学校 一年 鎌田 結愛 …… 17

鳴峰中学校 二年 伊藤 陽菜 …… 18

鳴峰中学校 三年 尾形 咲奈 …… 19

福祉作文(小学生の部)

《最優秀賞》

ふうかちゃんの気持ち

鳴瀬小学校三年 高橋 美礼

わたしには、ふうかちゃんというところがあります。ふうかちゃんは、自閉しようです。ふうかちゃんは、言葉でお話をする事ができません。

わたしは、ふうかちゃんといっしょに毎日のように遊びます。ふうかちゃんは、言葉では話さないけれど何をしたいのか分かる時があります。

ある日、ふうかちゃんとリビングにいた時のことです。ふうかちゃんが、わたしの手を引っぱりました。そして、わたしをテレビの前まで連れていきました。わたしは、「テレビが見たいのかな。」と思いました。そこでリモコンでテレビをつけました。それから、ふうかちゃんが見たそうな番組にチャンネルを合わせてみました。すると、ふうかちゃんは、うれしそうにテレビを見ていました。

「あ、このテレビが見たかったんだ。」

わたしはうれしくなりました。ふうかちゃんが何をしたかったのか分かったからです。それに、「ふうかちゃん、こんなことを考えていたんだ。」ということが分かったのも、うれしかったで

す。

でも、いつもふうかちゃんの気持ちが分かるわけではありませんせん。

ふうかちゃんがおもちやをたくさんちらかしたことがありました。わたしは、はじめは「だめだよ。」と言いたくなりました。でもすぐには言いませんでした。

「ふうかちゃんに『だめだよ』と言ってちゃんと伝わるのかな。」とまよったからです。それにわたしは、「どうしておもちやをちらかしているんだろう。」と思いました。何かしたいことがあるのかな何かいやなことがあるのかな。と考えました。

考えても、ふうかちゃんの気持ちが分からないこともあります。わたしが「こうかな。」と思ってもちがうこともあります。

そんなときは、ふうかちゃんの顔を見たり、どこを見ているのかを見たり、何をしているのかを見たりします。そうすると、「これが見たいのかな。」と分かることがあります。

ふうかちゃんといっしょにいてわたしは、言葉だけで気持ちを伝えるのではないんだ。と思いました。言葉で話さなくても、顔や目や動きで伝わることがあります。

そして、言葉だけじゃなくて、ふうかちゃんの気持ちを考えることが大切だと思いました。

これからも、ふうかちゃんが何かしたときに、すぐに「だめ。」と言ったり、「こうしたいんだな。」と決めたりしないで、「ふうかちゃんは、どうしたいのかな。」と、考えてみたいです。そして、ふうかちゃんの気持ちがあったときは、きっとまた、うれしくなると思います。

《優秀賞》

言葉だけじゃない伝える形

中新田小学校六年 佐々木 ゆい

私は夏休みの旅行帰り、たくさんの手荷物を持って電車に乗りました。残念な事に、席は空いていなかったで、つり革につかまる事にしました。さらに、つり革は高い位置にあったので、つかむ事にも苦勞をしました。その後も、少しかたを浮かせながら、手荷物を持ってつかまらなければいけなかったで、手も足もつかれきってしまいました。

すると、後ろからかたをたたかれました。ふり向くと、外国人のおじさんがいました。おじさんは、大変そうにつり革につかまる私を、かわいそうに思ったのか、席をゆずってくれたのです。日本人なら私は、

「ありがとうございます。」

とすぐにお礼の気持ちを伝えられていたでしょう。しかし、おじさんが、どこの国の人か分からなかったで、どうお礼の気持ちを伝えたら良いのか分からなくなってしまうました。とまどってしまった私は、おじさんにお礼の気持ちを伝える事ができませんでした。

私は、電車に乗っている間、おじさんにお礼の気持ちを伝えられなかった事に後悔していました。一方、頭のすみには、

（言葉がちがう人なのだから仕方がない。）

という気持ちもありました。しかし、前に外国語の学習をしていた時、「ジェスチャーを使うと、外国の人にも自分の思っている事を伝えやすくなる」と教わった事を思い出しました。私は、この事をヒントに、外国の人にもお礼の気持ちを伝えるにはどうしたら良いか、考えていました。そんな事をしているうちに、仕方がないと思う気持ちはうすれていきました。

やがて、電車を降りる時がやってきました。ぐうぜんな事に、おじさんと降りる駅が同じでした。

その時、おじさんと目が合いました。

（今だ）

私は勇気を出して、笑顔でおじぎをしました。これが私の考えた、言葉がちがついていても、お礼の気持ちを伝える方法です。すると、おじさんにもっこりと笑ってくれました。それを見た私も、また笑顔になりました。私はお礼の気持ちを伝える事ができて良かったと思いました。

この経験から、どんな人にも、しっかりと自分の気持ちを伝える事が大切だと感じました。それは外国の人だけでなく、耳などが不自由な人にもそうだと思います。言葉や気持ちの伝え

方や伝わり方が「ちがう」のだから、「仕方がない」ではなく、「これがちがうのなら、こうしよう」と自分の気持ちを伝える新しい形を作ってみてほしいと思います。私は、きっとそういう事を心がけていく事が、どんな人にも自分の気持ちを伝えられるようになる最初の一步になるのだと思います。私も、そういう事を迷わずできるように、がんばっていきます。

《優秀賞》

じまんのおばあちゃん

広原小学校四年 佐々木 悠士朗

「おはよう」

毎朝、笑顔でおばあちゃんにギュツとして、あいさつをします。夜は、バージンロードのように、家のろうかをうでを組んでいっしょに歩きます。そして、手をつないでいっしょにねます。おばあちゃんと2人きりになると、話がはずみます。おばあちゃんが作る料理は、おいしいです。つけものは特に最高です。近所みんなからほめられます。ぼくは、そんなおばあちゃんが、じまんでだいすきです。

「つかれたなあ」

時々、おばあちゃんが言います。お母さん、お父さんは夜さんの仕事があつて、料理、ぼくのおくりむかえ、宿題もみてくれて、とても忙しいです。だから、つかれてしまいます。そんなおばあちゃんにはずつと、元気でいてもらわないとこまるので、ぼくは、毎日、マッサージをしてあげます。かたもみ、足つぼマッサージをしてあげます。

「ゆうちゃん気持ちいいよ」

と言つてねてしまいます。朝になると、ふっかつします。また

つかれます。このように毎日つづきます。マッサージは、ぼくのルーティンです。

「助かるね」

毎日、学校に行く前に、ぼくは畑に行つて、野菜をしゅうかくします。トマト、きゅうり、オクラ、手に持てないくらいしゅうかくします。ぼくのせのくらいで実がなるのでちょうどいいです。だけど、おばあちゃんだと、しゃがんでしまうのでこしがいたくなつてしまいます。ぼくの出番だと思つて、楽しくしゅうかくします。ありがとうと言つてもらえらうれしいし、おばあちゃんの笑顔がみれるので安心します。そんなおばあちゃんには、ずっとずっとお手伝いをしていきたいです。

ぼくは、学校でふくしたいけんをしました。車いすに始めて乗りました。おもしろいと感じたけれど、こぐのが少しむずかしくて大変でした。自分でできない場合は、人助けしてもらわないといけません。だからぼくは、車いすに乗っている人を見かけたら助けようと思います。でも、おばあちゃんには、ぜったいに車いすに乗らせないように、自分ががんばつて支えます。

ぼくは、おばあちゃんがだいすきでたまりません。おこられることもあるけれど、とてもやさしいです。そして、いろいろと話をすることが楽しいです。いつまでも、元気で過ごしてもらわないと、ぼくはさびしく、悲しくなつてしまうので、お手

伝い、マッサージをしていきたいです。そして、ぼくは、金管バンドに入っているので、演奏をきかせて、ぼくのかっこいいところを見せてあげようと思います。「ゆうちゃん、かっこよかった」とにつこり笑ってくれるので、ぼくのパワーを届けて、元気モリモリにさせようと思います。おばあちゃん、元気でいてもらわないとぼく困るからね。

《佳作》

サンホームの夏まつり

小野田小学校三年 横内 碧真

七月三十一日夕方、ぼくは、やくらいサンホームでわ太こをたいてきました。太この先生に「やくらいサンホームの夏まつりでえんそうするぞ」と言われたけど、どこにあるか、どんなところなのか、わからなかったのも、お母さんに聞きました。お母さんは「夏休み学どうでお世話になっているふくしセンターのとなりにあるろう人ホームだよ」と教えてくれました。

ぼくは、ろう人ホームってどんな人がいるんだろうと思ってインターネットで調べてみました。すると、耳が聞こえにくい人や足が不自由で車いすを使ってた人や、しばらくの間だけおとまりしている人がいるところがわかりました。いろんな人が安心してすごせる場所なんだと知って、ぼくは太こでおじいちゃんおばあちゃんがよろこんでくれたらいいなと思いました。

いっぱい練習して、太このメンバーとサンホームに行きました。ひかえ室で出番をまっていたら、ひかえ室の外から、おまつりの音楽が聞こえてきて、ワクワクしました。「らい鳴さん、おねがいします。」と言われてステージに行くと、ホールにおじいちゃん、おばあちゃんがいっぱいいて、にこにこしながら見

てくれました。車いすにすわっている人や耳が聞こえにくいのか、はたらいっている人が耳の近くでゆっくり話しかけていました。やさしく声をかけたり、体をもつてあげたりしているのを見て、みんなが安心していられるようにしているんだなあと思いました。

ぼくはみんなに聞こえるように力いっぱいたたこうと思って、バチをぎゅうーとにぎって太こをたたきました。

でもぼくはアトピーがあつて手がぐちぐちゆしていて、たくと少しいたくて心の中で「がんばれ自分」と言いながらたたきました。えんそうが終わって、ぼくがさいごに「ありがとうございました」と大きな声で言いました。そうしたら、みんなが大きなはくしゅをしてくれてうれしかったです。

おじいちゃん、おばあちゃんがにこにこしてくれて、ぼくは太こでみんなをえ顔にできるんだと思いました。それから、はたらいっている人が車いすをおしてあげたり、耳の近くでやさしく話しかけていて、人をたすけるってこういうことなんだなと思いました。

ぼくも、太こでみんなを元気にできる人になりたいです。つぎのえんそうももつともつともつともつとがんばります。

《佳作》

しょう害者の世界

広原小学校四年 星 幸那

わたしは、シャルコーマリートウス病という病気です。手や足を動かすために大切な神けいの働きが弱くなっていきました。この病気があることで、走ることが苦手です。足がしびれて、いたくなる時もあります。リハビリにも通っています。また、右耳も聞こえません。でも、自分のことをかわいそうだとは思っていません。自分にとっては、これがふつうで、みんなといっしょだと思っているからです。だから、病気があるからといって、かわいそうなこととはかぎらないと思っていました。

でも、しょう害のある人達のこととは、かわいそう、大変そうと思っていました。そんな中、じゅ業でしょう害者の体験をしました。車イスに乗ったり、白じょうを使ったり、もうどう犬と歩いたり、ゆうどうすることも体験しました。目が見えないことは、こわく、一人で歩くことはあぶないと感じました。目の見えない人の話も聞くことができ、「かわいそうではないよ。でも、こまった時は助けてほしい。」と教えてもらいました。それを聞いて、わたしの考えは、変わりました。しょう害のある人は、見かけたらすぐに助けなければいけないのだと思っています。

たけれど、そうではなく、助けてほしい時にだけ手伝ってほしいと知りました。しょう害のある人も、それがその人にとっ
てはふつうのことで、わたしと同じなんだと思いました。

今後は、しょう害のある人を見かけ、こまっさいそいな時には、自分のできることで助けたいと思いました。

《佳作》

将来に役立つ事

広原小学校六年 相澤 佑磨

今回ぼくは、夏休み中におばあちゃんの家に行って、おばあちゃんとおじいちゃんと一緒に過ごしてました。そして、おばちゃんとおじいちゃんに将来役立つ事を教えてとお願いしました。そしたら、おばあちゃんとおじいちゃんは三つの事を教えてくれました。

一つ目は、健康な体、二つ目は、健全な精心、三つ目は、豊富な知識と技術の三つをおばあちゃんとおじいちゃんが教えてくれました。

これらの話は、おばあちゃんとおじいちゃんのけいけんした話だったので、すごく勉強になりました。

一つ目の健康な体に関しては、健康じゃないと出来無い仕事
が有ったり、大好きなサッカーや釣りなども出来無くなってしま
うので、健康な体が必要だと思いました。二つ目の健全な精
心に関しては、これから良い事、悪い事、色んな事が有ると思
うので、その一つ一つの事をけいけんし、自分を成長させ、色
んな人と仲良くなったり、カベにぶち当たった時の問題を乗り
こえるために必要だと教えてくれました。三つ目の豊富な知識

と技術に関しては、自分の人生の選択肢を増やしたり、人に
だまされず、自分の大切な人を守るためにも役立ち、さらに
現実の問題解決つにも役に立つと教えてもらいました。

今回、おばあちゃんとおじいちゃんに教えてもらえた三つ
の事は、言葉の意味をふくめて、最初はぼくには分かりませ
んでした。でも、おばあちゃんとおじいちゃんが内容教えて
くれたので、少しずつ理解できました。理解すると、全部が
とても大切な事で、やっぱりぼくより何倍も生きているおば
あちゃんとおじいちゃんはずいと思えました。

特にぼくが勉強になった事は、健全な精心に關する事で、
今のぼくは、少しいやな事が有ったりすると、怒ったり、や
りたくない事を後回しにしてしまう所があるので一生けんめ
い勉強しなきゃと思えました。

色々教えてもらいましたが、今回の作文を通して、自分か
らおばあちゃんとおじいちゃんに初めてこういう質問ができ
て嬉しかったです。おばあちゃんとおじいちゃんは本当に色
んな事を知っています。今回の事だけではなく、これからも
もつともつと色々な事を教えてもらいたいと思えました。

《佳作》

私の妹

広原小学校六年 菅 笑瑠

私の妹は、障害を持っています。

私の妹は障害があるから言葉では話せないし立ったり歩いたり
する事が自分の力では、できません。

だけどリハビリを日々積み重ねやつと自分の力で座れるよう
になりました。

私の妹は話せないけど表情で喜んでる事やいやがっている事
が分かります。

生まれた時から一緒にいると私の妹が何を思っているか分か
ります。

たとえば妹が怒ったりしてもとっても大切な妹です。

一緒に妹と過ごしていると私は妹から大きく3つのことを学び
ました。

一つ目は、世界には、妹と同じ身体障害を持っている人たちが
たくさんいることです。あまり障害を持っている人を見ないから
といってたくさん見ないで一人の人として見てほしいです。

二つ目は、発作のことです。

妹が始めて発作を起こした時は、不安の気持ちでいっぱいでした。

でもお母さんは落ち着いてしつかりとした対処をしていても安心しました。

三つ目は、周りの人の優しさです。

家族でイオンモールに行った時にエレベーターに乗ろうとしました。

そしたら先に乗っていた方がエレベーターの開くボタンをおしてくれて後ろに詰めてくれました。

エレベーターから出る時もずっと開くボタンをおしていてくれました。

私はとっても嬉しくなりました。

ほかにも飲食店に行った時にお母さんが妹にご飯を食べさせている時にご飯ができあがってしまつて私がとりに行こうとしたら二人のお姉さんが「私たちがとりに行くから座つていいよ」と言ってくれてとてもうれしくなりました。

でも中には、少しいやだな、など思う方もいるかもしれませんが、そんなふうに思わずみんな同じ人一人の人として見てほしいです。

福祉作文(中学生の部)

《最優秀賞》

自分にしかできないことがある

中新田中学校二年 小杉 悠太

三年前自分の足で思うように歩くことができなくなりました。そして歩くこと以外にも指にも障害があります。自分の疾患はこの薬を飲めば歩けるようになるとか、こうすれば歩けるようになるとかはないと医師から言われました。体の自由を奪われたことに深いショックを受けました。そして自分はこれからどうなるんだろうとも思いました。それでも今は週二回リハビリをしています。リハビリを始めたのは二年前、二年前出来なかったことが今ではできるようになったりちよつとした事でも自分にとってはすごい前進したように感じます。例えば自分でベットに移動できるようになったり段差を乗り越えられるようになったり最近では、握力は今も弱いけど前より一、二キロ強くなりました。ゼロに近い状態から、少しでも強くなりました。一キロはみんなからしたら一キロしかかもしれないけど自分からしたら一キロも感じます。このように今と前では違いがあります。リハビリは大変だけど嬉しい時もあります。それに障害がある人の暮らしが前まで分からなかったけど、自分も

障害がある人になって分かりました。例えばスーパーなどにある車いす駐車場に車いすとか歩行が困難な人じゃない人が車いす駐車場に停めているのをたまに見ます。しかしこの駐車場が埋まっていると障害がある人がスムーズに移動する事が大変なのでもう少し理解を深めてほしいと感じます。たしかに入口から近いところにあるため、停めなくなる気持ちは分かりますが体が不自由な人のためにこの駐車場を空けてくれれば障害のある人が暮らしやすくなっていくと思います。そして自分はこう思います。障害を持つているからこそ、新たな視点や工夫をする力が必要だと感じます。何もかもが制限されてるように思っても、実際にはその制限が自分にとっての成長のきっかけとなり新たな可能性を開く扉となつていることに気づきました。指や足が不自由でも、自分は自分で良いと、きずきましたし、自分にしかできないことだつていっぱいあることに気づきました。自分はその自由を信じて、できることから少しずつ進んでいきました。段差の乗り越え、ベットに移動する力、握力が強くなりましたりするよろこびを得るたびに、自分は達成感や力強さを感じます。このように自分の可能性を信じていることが、最も大切だと思います。どんな困難な状況でも前向きに挑戦し続けることで、必ず道は開けていくと確信しています。僕はこれからも、自分の力を信じ、進んでいきます。そして、他の障害を持つ人たち

たちとも共に支え合い、成長し続けることができれば、より豊かな未来が待っていると感じています。自分は日々の生活の中でそれを学び、少しずつ自分を変えてきました。これからも、できることを増やしていき、日々の努力を積み重ねていきたいと思っています。そして自分はこれからも自分らしく社会に出られるように工夫をしながら色々な事にチャレンジしていきたいと思っています。

《優秀賞》

大変だからこそ

鳴峰中学校二年 伊藤 つばさ

私には介護士の母がいます。母はいつも仕事で忙しく、あまり休みも多くはありません。そんな母を見て、私は疑問を抱き、母に問いかけました。

「介護士ってすごく大変そうだね。」

私がそう言うと母は

「大変だけど、その分やりがいがあるの。」

と言いました。その時の私には、母が言った言葉があまり理解できませんでした。なぜなら、高齢者の方の介護をして一体何がやりがいなのか分からなかったからです。毎日忙しく働いている母を見ると、介護士は大変なことばかりの仕事なのではないかと思っていました。

それから私は介護士の仕事に少し興味を持ち、職場体験でイサービスへ行くことにしたのです。体験前は

「介護士は大変だからなりたくはない。」

と思っていた、介護の仕事に就こうとはあまり思っていないませんでした。ですが職場体験を通してその考えは少しずつ変わっていききました。

職場体験当日、私は恐る恐る体験場所のデイサービスへ行き

ました。初めて行く場所だったのでどんな人がいるのか、どんな仕事をするのかが分からず、とても緊張している様子でした。すると職員の方たちが優しく出迎えてくれました。そのおかげで最初より少し緊張が和らいだのです。利用者さん達が施設に到着し、私は朝の会で自己紹介をするように言われ前に出て「鳴峰中学校から職場体験をしに来た二年の伊藤つばさです。

二日間ですがよろしくお願いします。」

と自己紹介をしました。私が言い終わると、みなさんが拍手をしてくれて不安な気持ちが軽くなったのです。こんな幼い中学生に自分の介護を任せる利用者さんから嫌がられるのが怖いという不安が私の中にはありました。ですがそんなことはなく、温かく迎えてもらえてこれから始まる職場体験が楽しみに感じました。その後は職員の方と一緒に、利用者さんのリハビリのお手伝いや、入浴をした利用者さんの髪を乾かしたり、利用者さんと話す時は自分はしゃがんで下から話すようにと工夫しながら利用者さんとの会話を楽しんだりなど、いろいろな体験をしました。体験中は私に声を掛けてくれる利用者さんが多く、とてもうれしかったです。

特にうれしかったのは、利用者さんからのさりげない「ありがとう」という言葉でした。私が利用者さんの髪を乾かし終わって

「終わりましたよ」と声を掛けると私に乾かしてもらった利用者さん一人一人が必ず

「ありがとうね」と言ってくれました。私は自分がしたことが誰かの役に立っているのだと感じました。髪を乾かすという自分にとっては小さなことでも相手にとっては助かる事なのだと気づきました。

午前の活動が終わり、昼休憩に入ると私は職員の方とお弁当を食べながら介護士の仕事について聞きました。

「介護士の仕事って大変ですか」

職員の方は「大変だけど利用者さんの感謝があるからやりがいを感じながら楽しく仕事をしているよ」と教えてくれました。その言葉を聞き、私は母が言っていた

「大変だけど、その分のやりがいがある」という言葉を思い出しました。私も利用者さんから「ありがとう」と言ってもらい実感した事で言葉の意味が少し分かった気がしました。

二日目もリハビリのお手伝いや、髪を乾かす事、計算プリントの丸つけなどをしました。

体験前、私は介護士を高齢者の方のお世話をする仕事としか考えておらず

「大変だからなりたくない」と思っていました。ですが二日間の体験を通して

「ありがとう」の言葉の大切さや、人の役に立つ喜びを改めて知りました。そして私は、この体験で「大変な仕事だからこそ、その分大きなやりがいがある」ということを学びました。

介護士の大きなやりがいを学んで、今自分は介護士になりました
と思うています。人の役に立てる介護士を目指して、今回の
貴重な体験を日常に生かしていきたいと思っています。

《優秀賞》

大好きなばあば

鳴峰中学校二年 佐々木 三祐

今年の春、私の大好きなばあばが脳の病気になった。いつも元気で、私に笑顔で話しかけてくれるばあばが突然倒れたと聞いたとき、私は頭が真っ白になって、すごく不安になった。無事退院することはできたけれど、ばあばの病気は今も完全に治ったわけではない。退院して数ヶ月が経った今でも、ばあばはめまいや頭痛にずっと悩まされている。

病気になる前のばあばは、いつも家事をしていて、じっとしている時間がないほどずっと動いている人だった。家族のために料理や掃除をてきぱきとこなす姿が、私にとっていつものばあばだった。しかし今のばあばは、少しでも動こうとはしてくれないものの、長い時間は動いていられなくなってしまった。一緒に緒にお出かけをしたときも以前のようには歩き回すことは難しく、ベンチに座って休憩している時間が明らかに増えた。

外見から見れば、骨折などのケガをしているわけでもないし、車いすに乗っているわけでもない。普通に座っているときは、どこかが悪いようには見えないけど、ばあばの頭の中や体の中では、突然おそってくるめまいや頭痛のせいで、すごく苦し

くて不安な気持ちでいっぱいなのだ。私は、本当はもっと動きたいのに動けないばあばの悔しそうな姿を見て、世の中には「見た目では分かりにくい病気の辛さ」を抱えて生活している人が、実はたくさんいるのではないかと気づいた。

これまで私が思っていた福祉とは、車いす用のスロープを作ったり、駅にエレベーターをつけたりするような、街の仕組みを変えることだと思っていた。もちろんそれも大切だけど、ばあばの病気を通して私が学んだのは、目に見えない痛みに気づいて寄り添おうとする「お互いを助け合う思いやりの心」の大切さである。今の私に、ばあばの病気を治すことはできない。最初は、苦しんでいるばあばの前で何もできない自分がすごくもどかしかった。だけど、お出かけのときに「あそこに椅子があるから座ろう」と声を掛けたり、荷物を持ってあげることにはできる。小さなことかもしれないけど、私が手伝ったときにばあばが少しだけ安心した笑顔を見せてくれたとき、こういう身近な人を思いやる行動こそが福祉の一番大切な一歩なんだと感じた。

社会には、ばあばのように一見すると元気そうに見えても、実は病気や体調不良にたえながら、なんとか頑張っている人がたくさんいると思う。私たちは、見た目だけで相手が元気かどうかを判断してしまいがちだけど、本当に大切なのは相手の立

場になって、かくれた辛さを想像してみるという優しさだと思う。私はこれから、ばあばのことをずっと支えていきたい。そして、学校や街の中でも、困っている人や辛そうな人がいたら、その人の見えない痛みに気づける人になりたい。そして誰もが無理をしないで安心して暮らせる社会を作っていきたいと思う。

《佳作》

祖母が教えてくれたこと

中新田中学校二年 宍戸 光

ぼくには、視覚障害者だった祖母がいる。しかし、祖母が亡くなった時ぼくはまだ小さかった。そのため、残念ながら祖母と過ごした記憶がほとんど残っていない。テレビで障害者について放送を見ている時、ぼくは母に「おばあちゃんはどうな暮らしをしていたの」と聞いてみた。

母の話によると、祖母は家の中や毎日のように通る近所の道など、頭の中に地図が入っている「慣れた場所」では、何でも一人でこなしていたようだ。目が見えなくても、手の感覚や音を頼りに工夫して生きる祖母の姿は家族から見ても本当にすごかったという。しかし、そんな祖母でも、一歩外に出て「初めての場所」に行くことは大変だったようだ。

どこに何があるか分からない空間を、目が見えない状態で歩くことは、想像を絶する大変さだったと母は語ってくれた。特に、初めて行く場所のわずかな段差や、急な坂道、予期せぬ障害物は、祖母にとって大きな壁であり、時には恐怖を感じるものだったようだ。一人で行動することの大変さと、危険と隣り合わせの緊張感を、母の話から強く感じ取ることができた。

祖母の話聞いて、私は、自分の通学路や街の景色を違う視点で見つめるようになった。それまで気づかなかった歩道の段差や、階段、点字ブロックの周りなどが、目の不自由な人にとっては、「大きな壁」になっていることに気づいたのだ。祖母が家で普通に過ごせたのは、慣れ親しんだ環境があったからだ。社会全体が初めての場所であっても障害のある人が安心して歩けるような仕組みになっていなければ、本当のバリアフリーとは言えないのではないかと、強く感じた。

私の中に祖母の直接の記憶はなくても、母が語ってくれた祖母の生き方は、今もしっかりと私の心に生きている。これから私は、困っているお年寄りや障害のある人を見かけたら、他人事だと思わずに、「何かお手伝いしましょうか」と声をかけられる人になりたい。一人一人の小さな優しさと気づきが、初めての場所でも誰もが、安心して暮らせる、温かい福祉の社会を作っていくのだと信じている。

《佳作》

「チーム地域活動」を広めよう

鳴峰中学校一年 塩田 樹

僕の通っている鳴峰中学校には、地域の役に立ちたいと思っている生徒が集まり、ボランティア活動を行っているチームがあります。それが「チーム地域活動」です。現在、一年生から三年生まで合わせて十一人の仲間と一緒に活動しています。

今年度初めての活動として、夏休みに入ってから地域の夏祭りの手伝いを行いました。内容としては、会場のイスを並べたり、ゲームの景品の準備を行ったりしました。特に、大変だったのがお菓子釣りの景品にクリップを付ける仕事です。小さいお菓子里にクリップを付けるという細かい作業で、それを百個以上作りました。思っていた以上に大変でしたが、地域の方々に、「お疲れ様。ありがとう。助かったよ。」

などと声をかけてもらい、うれしかったです。

実は、僕のお兄ちゃんも「チーム地域活動」で活動していました。地震の被災地への募金活動や小学校の学童に訪問して小学生と一緒に遊ぶなどの交流、その他にも地域の田植えの手伝いや学校の応援団と一緒に老人ホームに行っておじいさん、おばあさんと交流をするなど、いろいろな活動をしていたそうで

す。そんなお兄ちゃんに、地域活動をやってみてどう思ったかを聞いてみました。すると、お兄ちゃんは、

「地域に貢献することができて、とてもやりがいがあった。」

と教えてくれました。それを聞いて、僕は地域のために色々な活動をしているお兄ちゃんをすごいと思いました。また、今まで行ってきたボランティア活動の内容を聞くことができ、ボランティア活動でできることはたくさんあるということが分かりました。

僕は中学校に入学して、チームに入ってから数ヶ月しか経っていないため、まだ活動は少ないですが、これからも地域のために役に立てることを考えてやっていきたいと思います。ボランティア活動をすれば、いろいろな人に喜んでもらえるし、自分たちもうれしい気持ちになれるからです。こうした活動をする人が増えていけば、思いやりも増えていき、ますます加美町は住みやすい町になっていくはずです。

僕はお兄ちゃんのように、これからもたくさんさんの活動を行っていききたいと思います。また、こうした「チーム地域活動」の取り組みを広められるように、活動内容を写真やポスターに掲示し、たくさんの人に伝えていきたいです。そして、思いやりのある学校や町を目指していききたいです。

《佳作》

障害について感じたこと

鳴峰中学校一年 鎌田 結愛

私は、これまで障害のある人と接する機会があまりありませんでした。そのため、福祉についても詳しくありませんでした。しかし、小学校で福祉について学び、障害のある人の生活について知ること、多くのことを考えるようになりました。

驚いたのは、障害には色々な種類があるということです。車いすを利用している人や目の見えにくい人だけではなく、外見からは分からない障害もあります。私たちは、見ためで判断してしまうことがあります、それはとても危険なことだと思います。

また、福祉学習では、アイマスク体験や車いす体験について話を聞きました。目の見えない状態で歩くことや、車いすで段差を越えることは想像より大変でした。普段何気なく利用している道路や建物にも多くの不便があることを知りました。

その他に、障害のある人は、かわいそうな人ではなく、一人の個性を持った人であることも学びました。できないこともありますがその代わりに得意なことや好きなこともあります。私たちと同じように夢や目標を持って生活しています。そのこと

を知り、相手を特別視するのではなく、一人の人として接することが大切だと感じました。

私はバレーボールをしていました。チームには得意な人、レシーブが得意な人、声を出してチームを盛り上げる人など、それぞれの役割があります。みんなと違うからこそチームとして成り立っています。社会も同じで、一人ひとりの違いを認め合うことが大切だと思います。

また、障害のある人が安心して暮らせる社会をつくるためには、施設や設備だけでなく、人々の理解も必要です。例えば、困っている人を見かけた時に声をかける勇氣や相手の気持ちを考える行動が大切です。どれだけ設備が整っていても、周りの人の理解がなければ本当に暮らしやすい社会にはならないと思います。福祉について学んだことで、相手の立場に立つて考えることの大切さを改めて感じました。私は、これから、障害のある人だけではなく困っている人がいたら自然に手を差し伸べられる人になりたいです。そして、互いの違いを認め合いながら、誰もが安心して暮らせる社会づくりに少しでも貢献したいと思います。

福祉とは特別な人のためのものではありません。私たち一人ひとりが関わり、支え合うことで成り立つものです。これから福祉について学び、思いやりのある行動を心がけていきたい

と思います。

《佳作》

大切な人

鳴峰中学校二年 伊藤 陽菜

大好きだったおじいちゃん、おばあちゃんの手のぬくもりを今でもかすかに覚えています。私が幼いころに私のおじいちゃん、おばあちゃんは亡くなりました。当時はまだ幼くて「人が亡くなること」の意味はよく分かりませんでした。成長するにつれて、二人の思い出が少ないことに少し寂しさを感じるようになりました。

私の家には一緒に暮らすおじいちゃんもおばあちゃんもいません。けれど一歩外に目を向けると、地域のお年寄りのみなさんが、私のことを本当の孫のように温かく構ってくれたり、登下校のときにお年寄りの方が、あいさつをしてくれます。また、地域の行事のときに、

「大きくなったね」

と笑顔で声をかけてくれました。そのやさしい笑顔を見て本当のおばあちゃん、おじいちゃんと一緒にいる時のような温かい気持ちになり、血がつながっていないなくてもこんな私のことを構ってくれるのは、地域のお年寄りのみんなしかないなと温かい気持ちになるたびに思います。

私は地域のお年寄りのみなさんが、どうしてこんなに優しくしてくれるのだろうと考えました。学校で福祉という言葉を知ったとき私はボランティアなどの難しいことだと思っていました。しかし、地域の方々と交流を通して、福祉の本当の意味はもっと身近なところにあるのではないかと気づくようになりました。

福祉とはだれもが幸せに、安心して暮らせるようにすることです。地域の方々は、子どもたちが元気に育ち、街のみんなが笑顔で過ごせるようにと、いつも見守ってくれています。お互いを思いやって声をかけ合う心のつながりこそが、福祉の第一歩なのだと感じました。

今までは、地域の方々に見守られる側だった私ですが、これからは少しずつ支える側になっていきたいです。

そのために、まずは明日からできることを始めます。登下校のときには、地域の方々に自分から進んで元気に挨拶をします。また、街中で困っているお年寄りを見かけたら、

「何かお手伝いしましょうか」

と勇気を出し言いたいです。もっと自分のできることを増やして、たくさん恩返しができるようにがんばりたいです。また、亡くなったおばあちゃんおじいちゃんにやさしい子だなど思われるように地域のお年寄りのみなさんを支えていきたいです。

《佳作》

おばあちゃんの五百五十五円

鳴峰中学校三年 尾形 咲奈

「頑張つてね」

祖母は練習試合や大会の日の朝に必ずピカピカな五百五十五円をくれます。五円〇〇ご縁にあやかり、試合でたくさん勝てるようにという意味がこめられているそうです。私はそのお守りをポケットに入れて試合に向かいます。そうすると強い相手でも試合で勝てるような感じがしてきます。祖母がくれる五百五十五円は私にとって特別なものです。心の底から応援して、勝利を願ってくれる祖母の想いが五百五十五円にあります。自信をもって試合に挑める感じがするのはその祖母の想いがあるからだと思います。

私の祖母は、お出かけが大好きでとても元気な人です。趣味のゴルフに出かけたり、友達と旅行やご飯を食べに行つて楽しんだり、毎日おいしいご飯を作ってくれたりします。「祖母」という言葉からイメージする姿よりもずっとパワフルで、私はいつも祖母からたくさん元気をもらっています。しかし、そんな元気いっぱい祖母でも、時々なんでもないとこでつまづいたり、こけそうになったりすることがあります。その姿を見

きたいです。

たとき私はハツとしました。いつも元気である祖母の体も少しずつ変化していることに気づいたからです。それと同時に、私はこれまでの自分を振り返りました。祖母が元気だからといって、いつも甘えてばかりで、おいしいご飯やお小遣いをもらうことが当たり前になつていなかっただろうかと考えたのです。

私は福祉というと、高齢者の人は「周りが助けてあげなくてはいけない存在」のように言われることが多い気がしていました。でも私は祖母を見ていて、本当の優しさや支え合いはそういうことではないと思いました。私の祖母のように元気に楽しく生きている人もいます。それなのに「お年寄りだから」と決めつけて接するのは高齢者の方々の生き方を制限してしまうと考えます。だからこそ、本当に困っているときにだけ、さりげなく手を貸せるようになることが、一番大切な思いやりなのだと思います。一方的に支えられるのではなくお互いに支え合うのが本当の福祉の意味なのではないでしょうか。

私は、ポケットの中のお守りのおかげで、県大会に出場することができ、最後まで強い気持ちで戦い抜くことができました。私は高校に進学してもこれまでもらった五百五十五円を大事にして頑張りたいと思います。今まで精神的に支えてもらったように、今度は私が祖母を支えられる存在になりたいです。その思いを忘れず、人を思いやり、お互いに支える人へ成長してい